

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・1F 廃炉の先研究会

第 4 回 ・ 1F 地域塾
議事録

開催日時：2022 年 10 月 1 日（土）13:00-18:00

会場：ふたば未来学園、Zoom ミーティング

参加者数：68 名

総合司会：鈴木知洋（副塾頭）

プログラム

- 13:00-13:15 なぜ、「地域のなかの廃炉」を考えることが必要なのか
松岡俊二（塾頭）
- 13:15-13:30 我々はどこから来て、どこへ向かうのか（これまでの1F地域塾の振り返り）
小磯匡大（副塾頭）
- 13:30-13:45 1F事故調査と1F廃炉について
話題提供者・木原昌二（原子力規制委員会・原子力規制庁）
- 13:45-14:00 1F廃炉政策について
話題提供者・福田光紀（経済産業省資源エネルギー庁）
- 14:00-14:15 1F廃炉と地域社会の復興について
話題提供者・日比賢二（東京電力復興本社）
- 14:15-14:30 質疑と議論
（5分休憩）
- 14:35-15:25 6グループの「対話の場」
（5分休憩）
- 15:30-17:00 6グループからの発表
司会・小磯匡大（副塾頭）・鈴木知洋（副塾頭）
- 17:00-17:50 総合討論・地域のなかの1F廃炉の先を考える
- 17:50-18:00 閉会にあたって
ここから「新しい旅（バタフライエフェクト）」が始まる：今後の1F地域塾について
松岡俊二（塾頭）

1. 報告後の質疑応答

研究会：木原さん、福田さん、日比さんの報告は、単なる活動紹介や情報説明であったように感じ、思考停止してしまったところがあった。一方的な情報の伝達になると、ワクワク感が止まってしまう。

松岡報告では、この場がバタフライエフェクトの始まりだという話や、科学・政治・社会の協働、処理水決定プロセスの失敗を繰り返してはいけないという話があった。社会的協働がうまくいかなかったという認識は、住民も、国・東電も、ある程度は共有していると考えられる。

小磯報告では、世界史に書かれている人間の希望や未来をより良くしたいという思い、さらにはみんなで見える夢は現実になるという話があった。この場にいる一人ひとりのソクラテスが、どのように、どういう世界と未来を作っていくのだろうか、この点に関して、木原さん・福田さん・日比さんのお考えを伺いたい。

森口(副塾頭)：木原さん、福田さん、日比さんは本日参加いただき、1F 地域塾で報告いただけたことは大きなことだとは思いますが、公式に普段話されていることを同じトーンで話されたと感じている。丁寧に分かりやすく話すだけでは不十分で、人々が何を知りたいと考えているのかといった点にもっと歩み寄っていただきたい。専門家や役所の人もそうだが、自分の知っていることや伝えたいことばかり話すことになりがちである。誰に伝えるかを考慮し、話の中身を考えないと、1F 地域塾という場の意義がなくなる。ディスカッションの場で、塾生から知りたいことをぶつけることによって、次回からどのように話せば皆さんの質問に答えられるかが分かるようになるだろう。ぜひ、この後のディスカッションの時間を活用していただきたい。

木原(原子力規制庁)：現在は廃炉事業の安全確保にほとんど集中している。そのため、1F の現場を確認し、把握した状況が今後の廃炉事業にどう影響するのかを検討することが必要になり、今はそうした現場対応に追われている。最終的に目指す 1F 廃炉の状態について、なかなか考えが至っていない状況である。

福田(経産省)：1F の廃炉自身は東京電力にその責任がある一方で、非常に困難な作業であることも重々認識をしており、国もリスクの高い研究開発分野においてチームを作って対応しようとしている。現場では様々な課題が生じている状況である中で、将来的に 1F を安全な状態にもっていくために、いろいろな専門家が集まって、協力しあい、廃炉事業を成し遂げていくことが非常に大事であると考えている。さらに 1F についての課題や 1F で起こっていることをどのような手段で皆さんにお届けすべきか、アイデアをいただきながら工夫をしていきたい。

日比(東電)：一方的な結果を伝えることが多く、一方通行になりやすいとご指摘いただいた。その通りだと考えた。1F 廃炉の先は課題がたくさんあるので、一つずつ対応するしかない。そのために、このような場で多世代の人が関わって話しあうことが求められる。東電は事故を起こしてしまった当事者として、教訓の伝承、原子力の安全確保に少しでも貢献し、世界にも原子力発電所の安全運転についての教訓を伝えることが我々の使命である。対話の場、学び場の大事さを感じ、これからもしっかりと役割を果たしていきたい。

井上(副塾頭)：木原さん、福田さん、日比さんの話を聞き、高校生を対象とすると難しいと感じた。立場上の難しさがあるかもしれないが、今何が課題なのか、将来どうなるのか、それが地域の人々が知りたいことだと思われる。今後、これらのことをより詳しく説明に付け加えていただきたい。

今日の報告での用語の難しさを考え、後で塾生から「この話を聞きたい」と積極的に言っていただきたい。この 1F 地域塾は、いかに今日の報告のような技術的側面と社会的側面をつなぎながら、1F 廃炉の先、福島復興を考えることが目的である。それについて、塾を主催する者として、次回に向けて考えていく必要がある。

1F 廃炉の先は非常に課題が多くあるが、課題があるところに種がある。その種が技術の種だけでなく、社会科学や地域づくりの種にもなる。こうした社会的側面のことも今後の 1F 地域塾で考えていきたい。

2. グループ発表

(報告内容は報告資料と YouTube 録画を参照ください)

3. 総合討論

崎田(副塾頭)：1F 地域塾は、1F 廃炉の先を考える、語り合い、学び合いの場である。私が大事にしたいのは、① 廃炉が今どうなっているのか、② 地域社会にとっての廃炉とは何か、③ 将来の 1F 廃炉の先がどうなるのか。これらの 3 点をみんなで考えていきたい。

今日は6つの班の皆さんからの発表を伺って、課題の共有や学び合いの場になったと思うが、まだ話し合いを深めていない部分がある。これまで4回の1F地域塾の経験を、今後はどう生かしていくのか、それについて、皆さんのご意見を伺いたい。

塾生：漁師として、来年の春に始まる処理水の海洋放出が大きな課題であると思う。塾頭から紹介されたスリーマイル島事故の汚染水は、地元の自治体の裁判によって、河川放出せずに蒸発処理をしたいという話があったが、数年前にこのような対話も場を作っていたら、トリチウムの海洋投棄とは違った結論になったのではないかと考えている。町民の帰還を最優先にするために、大熊町や双葉町の町長の1F敷地内からタンクを早く撤去して欲しいという気持ちは分からなくはない。事故当初、構内とはいえ、高濃度汚染水がただ漏れになっているのを、ただ眺めることしかできなかった。また、2014年、2015年に行われた、地下水バイパスとサブドレンから汲み上げた水を海洋投棄処分するにあたり、トリチウムを含む汚染水は海に流さないという国や東京電力との約束は今でも成立していると、漁業者の自分が勝手に思い込んでいた。海洋投棄は、たとえ基準値に薄めても、放射性物質の総量は変わらない。この点を考えると、スリーマイルアイランド原発の事故処理において実績のある蒸発処理法を採用すべきだったと思う。これからの季節風である北西の風に乗せ、東の海側に蒸発させるという方法が良いのではないか。これは漁師としての、今更言っても叶うわけがないただの思いである。

1F地域塾では様々な人たちが現実を見聞きし、知恵を出し合って、小さな羽ばたきを続ければ、バタフライエフェクトは起こると思う。1F廃炉の先を含め、様々な問題点を網羅する素晴らしい学びの場である。ふたば未来学園の学生さんたちの参加もとても意義深い。たぶん、私が生きているうちには1F廃炉の先を見ることはできないだろうが、これからも1F地域塾に参加し続け、バタフライエフェクトを起こしていきたい。

塾生：1F地域塾を振り返ると、非常に有意義な対話の場だったと感じる。その反面、まだ議論を続ける必要があるところがあるし、やっとスタートラインに立ったとも感じている。個人的な反省としては、対話の場を自分の中だけで完結させずに、役場の職場に持ち帰ってフィードバックをもらい、行政の中でも仲間を増やしたい。

今後の展望について、今回は東電と人たちともグループを通して対話の機会が持てたことが、非常に良かったと思う。東電の立場を考えると、こうした場に参加して地域の人々と対話するのは、やはり緊張したり、身構えたりしてしまうと感じた。東電の方も、原発や廃炉のことを全て知っている人はいないと思う。ただし、全てを知らなくても、対話の場に参加し、地域社会と同じ目線で話すことが、信頼関係の構築の一番の近道であると考えます。是非、今後も東電の方には地域塾に参加し続けてほしい。私たち地域住民も対話しやすい雰囲気を作る必要がある。

塾生：私は富岡町出身で、富岡町在住の地域住民として、1F地域塾に参加した。一番目の感想は、高校生に感動したということである。私が在学したとき当時は、この校舎が建設されていて、自分も毎日あの坂を登ってきていた。今の高校生たちが、これから自分の未来と双葉郡の未来について、あんなに熱く語るのにとっても感心した。生活の中で普段考えないことを熱く語れるのは、そのこと自体が未来であると感じた。これからも積極的に1F地域塾に関わっていきたい。

高校生：私はEグループに参加した。グループ討論で、1F地域塾のような対話の場で、話すだけではもったいないという意見があった。その意見を受け、自分が今考えているだけにとどまって、行動に移していないことを強く感じた。また、今回もらったパンフレットでは私にとっては分からないことだらけだった。子供目線で伝えたいことなどをパンフレットによりわかりやすくまとめたら、より多くの人に伝えられるのではと思った。

私は中学校の段階から探求活動をしてきた。その時、学校の名前を借りないと言われたことがあり、学校の名前を借りることに少し躊躇ってしまった。そのため、地域塾のような、地域のいろいろな方、様々な経験や知識を持っている方と一緒にいる場が、私にとって良い機会だと思った。この機会を大事にし、また行政の方や地域塾の方と対話を続けていきたい。

高校生：私はBグループに参加した。前半の報告が形式的になっているという指摘があったが、実際に本音を聞けたし、言えたことは、すごく意味があったと思う。その本音もいろんな立場があり、よそ者は誰か、身内は誰か、その境目はどこにあるのか、このような根本的な疑問を持つことができたのは、大きな意味があったと考える。

私も中学校の段階から探求活動をしてきた。探求活動の実施、発表、発信などの問題について、クラスメートといろいろと相談していた。今思えば、クラスメートと地域のことを気張らずに素直に話すこと自体が素晴らしいと感じてきた。地域塾も気軽に話し合える環境を作ったらいいと思った。

高校生：福島市から、毎回、未来学園会場に参加し、広野町が自分の庭になったような気持ちである。距離はあるが、毎回ワクワクした楽しみな気持ちで広野町へ来ている。それは、この場の温かさであり、学ぶことが多いからだと思う。うちの高校でもたぶん参加したい人がいるが、やはり物理的な距離が参加のネックになってしまう。オンラインでも限界があるかもしれない。今後は、例えば会場を増やすなど、いろいろ工夫して、参加したい人が来られるようになったらありがたい。

研究会：浪江町出身である。今日、高校生たちが地域のことをたくさん考えてくれたことは、本当に嬉しいと思う。1F 地域塾の全部には参加しなかったが、今回の1F 地域塾は様々な分野、組織の専門家、それから地域の皆さんと対話できる貴重な機会だった。これだけ幅広い、しかも対立構造にあるような分野の専門家が一堂に会して議論するのがすごく珍しいし、こうした対話の場を作るのもとても難しい。組織・運営の皆さんに感謝したい。

多様な専門家のお話を伺う中で、高校生の皆さんもそれぞれの方の立場や組織によって言いづらいことを察することができたかと思う。社会に出て名刺を持つ立場になったら、自由に発言できなくなることがある。発言しないでいると、考えることすらなくなる。それは、大人の悪いところでもある。そのため、まだ名刺を持たず、何者でもない高校生の皆さんが素直に考えて自由に発言することは、大人にとってとても羨ましい。高校生の皆さんは社会を変える力を持っていると思うので、今の努力をぜひ続けてほしい。

1F 地域塾の目的に「同志平等」という言葉がある。同志とは同じ志を持つ我々という意味である。地域塾に参加している塾生は、それぞれの立場があるが、その立場を超えた志を共有していると思う。その志が何かはまだ不明確だが、いろいろな立場の人が同じ方向を目指していること自体から、なんとなく実感できたと思う。第2回1F 地域塾では、エンパシーの力とその有用性が強調されたが、エンパシーが対話を継続するには必須な力だと思う。今日の皆さんのお話から、多くのグループが対話の時間が不十分で残念だったとのコメントがあった。それは、対話の継続が、立場の違う人が共有する志を明確化するには必要であることに気づいたのである。

中国から伝わった「知行合一」という言葉がある。知って行わないのは未だ知らないのと同じで、知っている上は必ず行動に現れるという意味である。私も含め、次の地域塾を待つのではなく、今日から能動的に疑問や提案を社会に投げかける行動をすべきである。1F 地域塾からその勇気をいただいた。

福田(経産省)：4回の1F 地域塾全てに参加させていただいた。その中で、どのような方法で皆さんに1Fの廃炉の状況を知っていただくか、さらに、皆さんが何を知りたいと思っておられるかについて、議論したいとご提案し、貴重なアイデアをいただいた。例えば、第3回1F 地域塾で1Fの見学が行われ、塾生の皆さんに1Fを実際に見ていただき、議論いただいた。そういう機会が非常に大事であり、今後、東京電力と協力し、そういった機会をより多く作っていききたい。

また、今日の議論の高校生の声の中で、いろいろなディスカッションができるとありがたいという意見があった。私たちを呼んでいただければ、いつでも学校に伺う。私たちとしても高校生の皆さんのお話をいただきながらディスカッションできたら非常にありがたい。ぜひ呼んでいただければと思う。

本日のEグループの討論では、高校生が自分で分かりやすいパンフレットを作りたいというアイディアがあった。今年、福島の学生と協力して廃炉を説明するチラシを作成するプロジェクトを行った。資源エネルギー庁のホームページにその時作ったチラシが載っている。皆さんの視点から分かりやすい伝え方でパンフレットを作るのが大事であると感じた。そういうと取り組みを引き続き検討していきたいし、皆さ

ん自身がチラシを作る際には是非お手伝いしていきたい。

1F 地域塾はいろいろ方と話し合う良い機会である。ぜひ続けて参加していきたい。

木原(原子力規制庁)：本日は事故分析について話題提供をした。やはり内容が難しく、今後いかに聞く側の興味を起し、相手の聞きたいことをどう捉えるかを勉強したい。これまでは研究機関や海外の会議で1Fの事故分析を説明してきたが、高校生や一般の方々の知りたいことにどう対応するかを考えたい。事故分析と1F廃炉が進んでいる中で、これからも対話の場に参加し続けたい。

日比(東電)：今日は実はとても緊張して参加した。皆さんの応援と厳しいコメントを、真摯に受け止めていきたい。地域との繋がりを作り、地域に受け入れていただいて、廃炉と復興の両立を成し遂げたい。こういう対話の場に参加するのは毎回緊張すると思うが、皆さんとお話しができたらい。それから、高校生目線の分かりやすいパンフレットについては、ぜひお願いしたい。東京電力だけが作った情報の信頼性が疑われることもあるし、我々はいろいろな方の意見を聞きたい。特に高校生の考えをもとにしたパンフレットがありがたい。ぜひ一緒に作らせていただければと思う。

研究会：今日のお話の中で、お互いに気軽に話せるような関係性を作ることや、同志平等の「志」とは何か、処理水の悲しい出来事を繰り返してはいけないという願望、そして、こうした対話の場をより早くすればよかったとの発言が印象に残った。今後はこれらのことについて議論できたら良い。未来の希望が語られていないのが残念だというコメントは、私も重く受け止めた。小磯報告での「みんなで見る夢は現実となる」との言葉は持ち帰りたい大きな言葉であった。

森口(副塾頭)：ふたば未来学園の高校生だけに委ねていてはいけない。横に展開し、全国の高校生が1F廃炉を考えるきっかけがあると良い。廃炉は事故炉だけでなく、各地の原発でいろいろな問題があるため、参加者を広げることが大事である。話題提供の中身も今後よりよく準備していきたい。以前1人のふたば未来学園の高校生が、国内の交換留学というアイデアを提起した。未来学園の高校生が他の地域に行って学び、他の地域の高校生も未来学園に来て学ぶということである。そういう取り組みも含め、いろいろな方法によって対話を広げたい。1F地域塾自身は続いていくが、地域塾だけではもったいない。1F地域塾に限らず、どのように取り組みを広げていくかを考える必要がある。

井上(副塾頭)：高校生の皆さんがここまで1F廃炉を熱心に考え、関心を持っていることに驚き感激した。このように老弱男女が一同に1つのテーマをしっかりと議論することは、日本社会ではとても珍しい。こういう情報共有は1F廃炉の先を考える上で非常に重要である。

また、伝える側と聞く側の間のギャップが大きいと感じた。なぜギャップがあるのかを深掘りしたい。先ほど分かりやすいパンフレットの作成の話があったが、パンフレット作成だけでなく、さらに次の一步を考える必要がある。

福島復興は、やはり福島の地域社会の人々がメインプレーヤーである。したがって、地域社会の人々がどんどん声を上げる必要がある。そうしたら、ギャップも縮まっていくだろう。そのためにも、1F地域塾の発展を楽しみにしている。

4. まとめ

松岡俊二(塾頭、早稲田大学)

(報告内容は報告資料とYouTube録画を参照ください)

【第4回 1F 地域塾の会場の様子】



以上